

【資料】

高校の進路指導に関する実態調査

寺下榮, 村松毅 (静岡大学)

高校の進路指導の実態について調査した。最近の生徒の傾向として、学習意欲はそれほど低下していないものの計算力などが弱まっていると認識する教員が顕著であること、国立大学志望者に対しては自己採点結果など入試データを重視していること、前期は「生徒の志望を優先」、後期は「合格を優先」とした進路指導が行われていることなどが分かった。進学校では、オープンキャンパスについては「高1のときから参加するように勧めている」のに対し、進学相談会については「特に勧めていない」という回答が多かった。

1 調査概要

本調査は、高校の進路指導担当教諭を対象に、静岡大学に対する認知度や進路指導全般に関する考え方について把握することを目的に、平成22年3月、全国612高校に調査紙を郵送し、同年4月末日までに346校から回答を得たものである。

調査対象校は表1に示すように地域性や本学への出願状況を按配し、3つの地域区分を設けて選定した。回収率は全体で56.5%。県内の回収率が最も高い。

2 回答高校の属性

回答を得た高校のプロフィールは表2のとおり。卒業予定数(=第3学年生徒数)は200人~400人の高校が約8割で、設置学科は

表1 調査対象区分と回収状況

調査対象高校	地域	送付数	回収数	回収率
静岡県内の高校	県内	145	94	64.8%
岐阜・愛知・三重 県内高校の内、 19~21年入試で 本学志願者が1 人以上の高校	東海	237	134	56.5%
東海4県以外の 高校の内、19~ 21年入試で本学 志願者合計が10 人以上の高校	全国	230	118	51.3%
合計		612	346	56.5%

表2 回答高校のプロフィール

設置学科	校数	構成率
普通科	305	88.2%
理数科	44	12.7%
総合学科	9	2.6%
工業科	19	5.5%
商業科	38	11.0%
農業科	12	3.5%
無回答	0	0.0%
卒業予定数	校数	構成率
100人未満	9	2.6%
100人台	41	11.8%
200人台	155	44.8%
300人台	110	31.8%
400人以上	23	6.6%
無回答	8	2.3%
卒業生の進路	平均(%)	
大学・短大進学	75.0%	
専門学校進学	12.0%	
就職	13.0%	
文理分け	校数	構成率
あり	283	81.8%
なし	63	18.2%
無回答	0	0.0%
文理分けの学年	校数	構成率
1学年から	3	1.1%
2学年から	255	90.1%
3学年から	13	4.6%
無回答	12	4.2%
(構成率の分母は文理分けありの283)		
国公立大学合格数	校数	構成率
10人未満	90	26.0%
10人以上	47	13.6%
30人以上	32	9.2%
50人以上	59	17.1%
100人以上	117	33.8%
無回答	1	0.3%

表3 地域別・国公立大学合格数別構成率

	県内	東海	全国	全体
10人未満	13.3%	12.4%	0.3%	26.0%
10人以上	4.9%	7.2%	1.4%	13.6%
30人以上	2.6%	4.3%	2.3%	9.2%
50人以上	3.2%	5.2%	8.7%	17.1%
100人以上	3.2%	9.2%	21.4%	33.8%

普通科が約9割を占めた。大学・短大への進学率は75%（浪人を含む）。文理分けは82%の高校で実施しており、その場合90%が2年次から分けている。表2には示していないが、進学対策コース（またはクラス）を設けている高校は約半数。実施している例では特進コース（クラス）が28%、国公立大コース（クラス）が25%であった。

また、進学実績の指標として有効と思われる国公立大学合格数は、「10人未満」が約26%、

「100人以上」が約34%と、両端に集中している。

以下の各問いの集計分析では、地域の区分、国公立大学合格数の別を適宜援用し、考察を行っていく。ちなみに、上記をクロス集計した構成率は表3のとおりである（分母は346）。

国公立大学合格数で最も多い集団は「全国」の100人以上で約21%、次いで「県内」の10人未満の約13%である。これらの数字を念頭に、以下の集計結果をご覧いただきたい。

3 集計結果

3.1 最近の高校生の傾向について

この調査では、はじめに学力や意欲など9つの項目について最近の高校生の傾向を尋ねた。回答の分布は図1-1のとおりで、「強まっている」「やや強まっている」

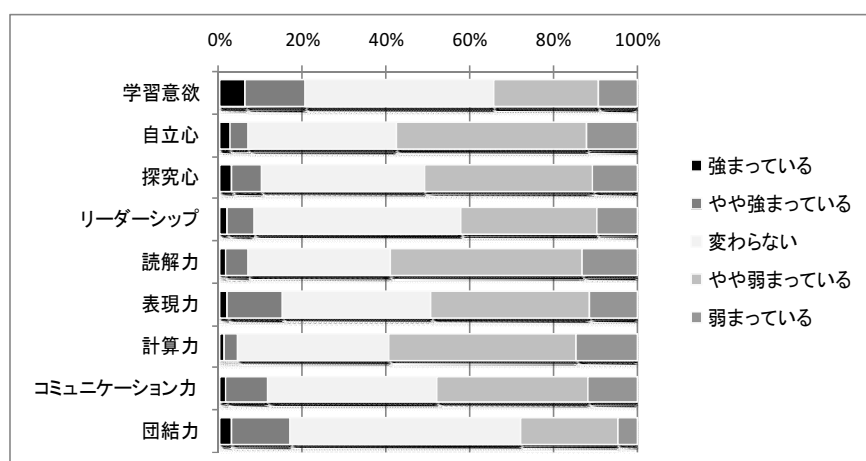


図1-1 最近の高校生の傾向について

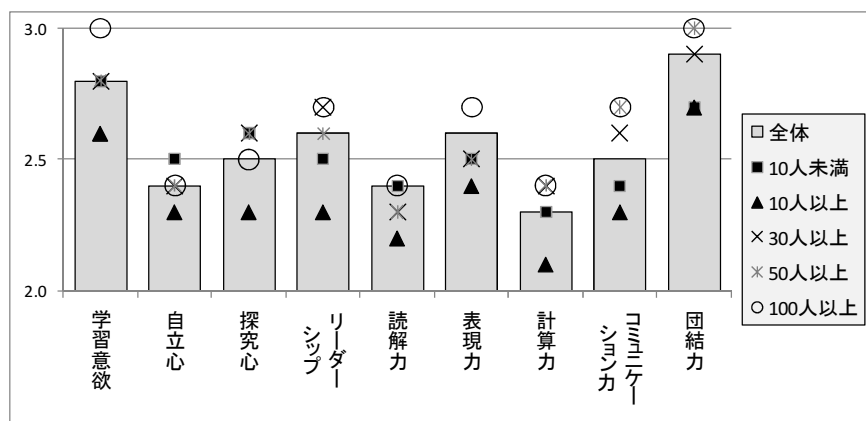


図1-2 最近の高校生の傾向について（国公立合格数別）

「弱まっている」「やや弱まっている」という肯定的な意見は極めて少なく、「弱まっている」「やや弱まっている」との辛い評価が目立つ結果となった。特に評価が低いのは「計算力」「読解力」「自立心」である。一方、「学習意欲」への肯定的評価が「変わらない」を含め6割以上に上り、「団結力」は7割に達している点は興味深い。

この回答結果について、「強まっている」～「弱まっている」に5点～1点の点数を与え、その平均値を国公立合格数の別で見たものが図1-2である。全

体平均は棒グラフで示してあるが、国公立合格100人以上のいわゆる進学校では全項目で全体平均と同等またはそれ以上の評価となっており、50人以上の高校がそれに続く。しかし、国公立合格数に比例するわけではなく、最も評価が辛いのは10人以上の高校である。

3.2 国立大学志望者への指導について

国立大学志望者への指導で重視する観点を11項目挙げて重要度を5～1のウエートで尋ねた。ウエート平均値の高い順に、国公立大学合格数別の集計を図2に示す。

最も平均値が高いのは「センター試験の得点率（自己採点結果）」4.4で、次いで「予備

校などの入学難易ランキング」3.7となっており、入試データを最重要視していることがわかる。これらはウエート5と4の比率が高いのも特徴的だ。逆に、最も重視されない項目は「新聞やTVでよく目にする教員がいるかないか」で、全体平均値は1.7。ウエート1（重視しない）が約半数に上る。

国立大学合格数別に比較すると、全体的には大きな差異は認められないが、合格数10人未満の高校が「推薦入試・AO入試などの進学実績があるか」を特に重視している傾向を指摘できる。

3.2 推薦入試・AO入試の指導方針

国立大学の推薦入試とAO入試について指導方針を聞いた。選択肢を同一に揃えたので回答状況の違いを比較したい。（図3）

推薦入試・AO入試とも、最も多い回答は「生徒の適性・意欲に応じて積極的に活用したい」である。次に多いのが「生徒個人の希望に任せる」となっており、これら2つの回答が上位を占めたことにより、全般的には推薦入試・AO入試に対する肯定的な意見が多いことが確認できる。

しかし、国公立大学合格数別に見ると、推薦入試・AO入試とも、「生徒個人の希望に任せる」傾向は合格数が多いほど強まり、逆に「積極的に活用したい」は合格数が少ないほど強くなる傾向が見て取れる。これは、生徒の意思を尊重しながらも、進学校ほど推薦入試やAO入試を本音では敬遠していることを示していると思われる。

「早期の合格は望ましくない」「原則として出願させない」といった消極的な意見は合格数100人以上の高校が多く、進学校では推薦やAO入試を否定する先生方が少なからずいるようだ。「センター試験の受験を義務づけるなら認める」を選んだ高校は、合格数30人以

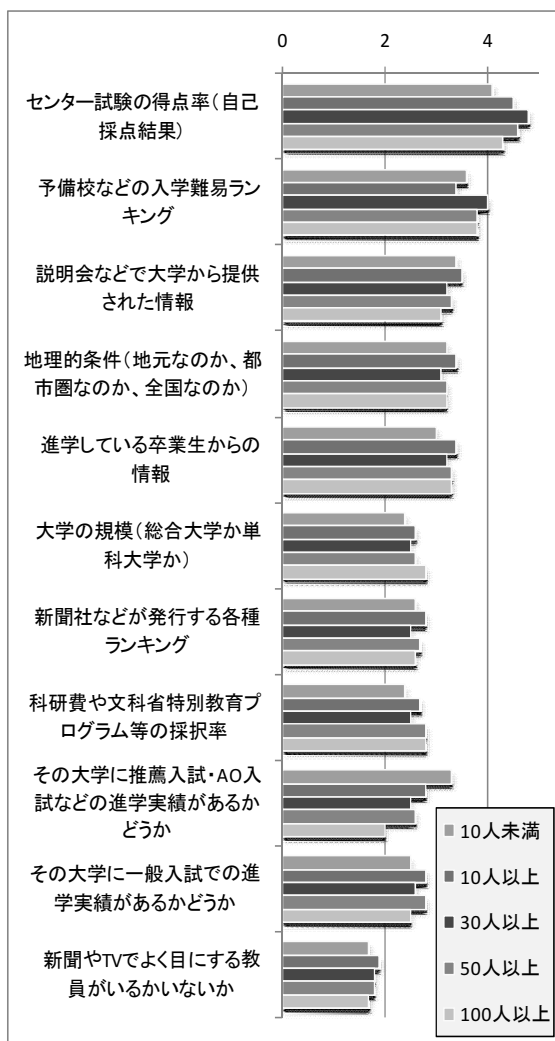


図2 指導の際に重視する項目

上の中堅進学校が突出しており、3年生全体をセンター試験まで引っ張りたいという意向が強いようだ。

前期日程・後期日程ともに「生徒のタイプに合わせ、個別対応の指導をする」が最も多くの回答を集めた(図4参照)。ただ、この選択肢は建前として選びやすい優等生的な選択肢である。前期日程・後期日程それぞれの指導の特性は、自己採点の結果を見て、「合格を優

3.3 一般入試の指導方針

一般入試の進路指導方針を尋ねたところ、

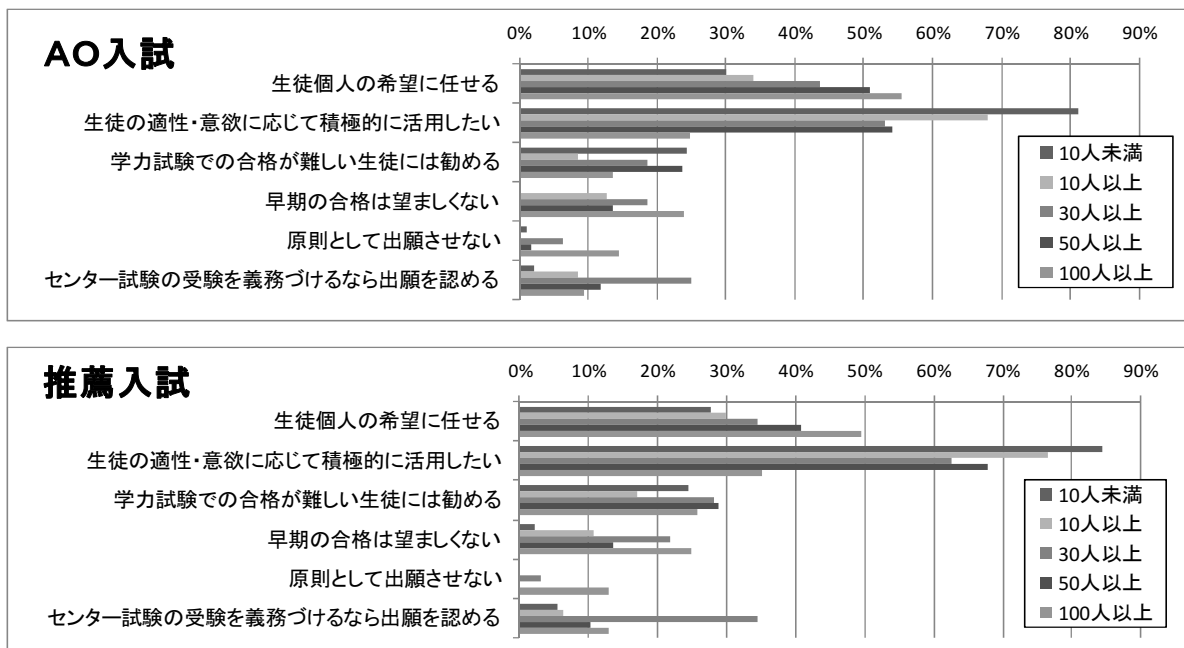


図3 推薦入試・AO入試の指導方針

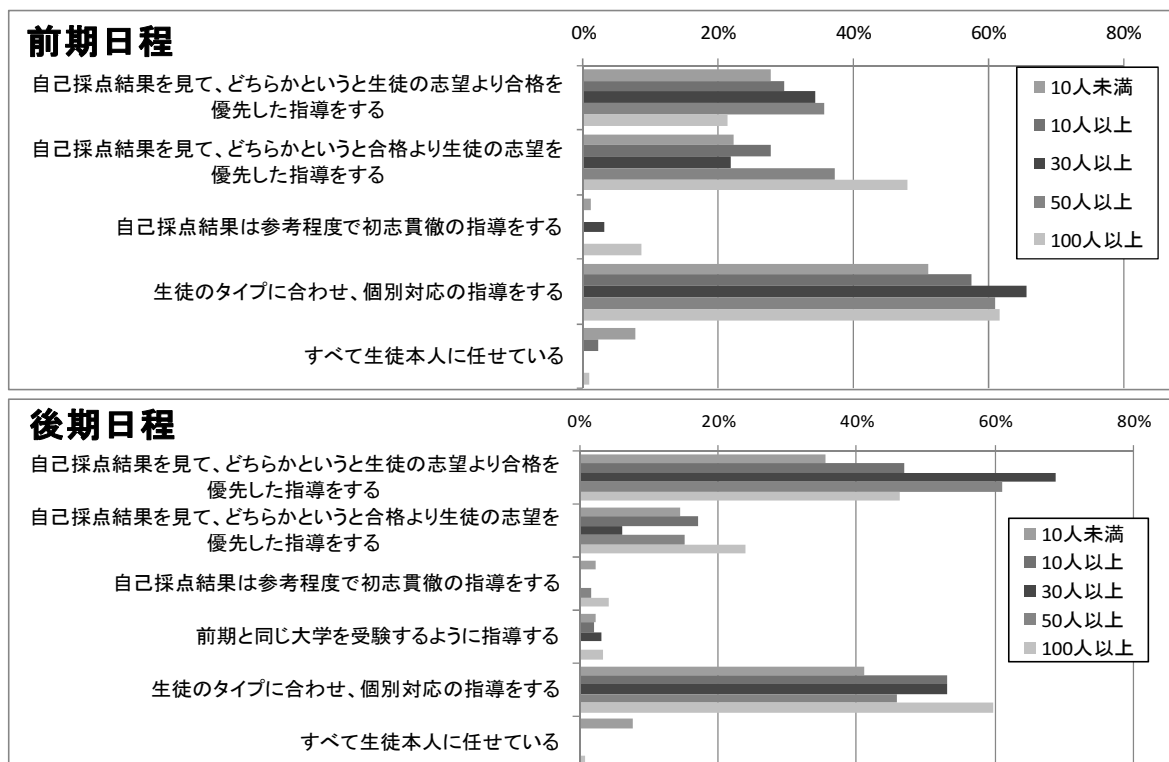


図4 前期日程・後期日程の指導方針

先」するのか「志望を優先」するのかの選択に表れると言えよう。

前期日程の場合は「志望を優先」がやや多く、後期日程の場合は「合格を優先」が大差で多くなっているところを見ると、「前期は志望優先、後期は滑り止め」という指導上の位置付けが明確になっている。また、「自己採点結果は参考程度」という選択肢はほとんど選ばれておらず、センター試験の成績が出願に与える影響の大きさが示されている。なお、後期日程には「前期と同じ大学」という選択肢を設けたが、そのような考えをする高校はかなり少なかった。

3.4 進路指導の学年進行

進路指導の具体的活動をどう行っているか、各学年について尋ねた。図5にその結果を示すが、まず、「大学進学を意識するような指導は特にしていない」高校はほぼ皆無に近いこ

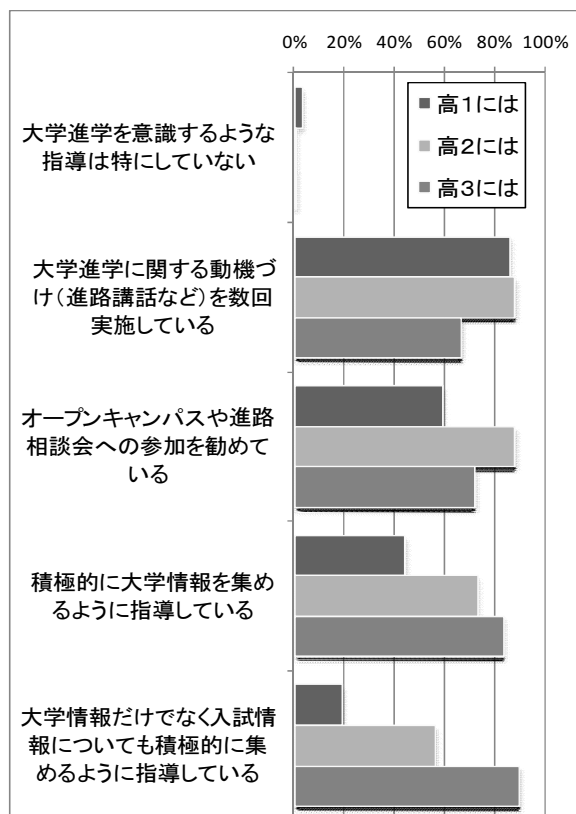


図5 学年別の進路指導重点策

とがわかる。

そのほかの4項目「動機づけ」「オープンキャンパス等」「大学情報収集」「入試情報収集」の活動を学年ごとに見ていくと、それぞれの項目で学年による違いがはっきりと表れ、1年次から3年次への指導の流れがよくわかる。

「動機づけ」は多くの高校で行われているが、主体は1・2年生。「オープンキャンパス等」への参加推奨は2年次がピークだが、1年生にも半数以上が勧めている。

「大学情報収集」と「入試情報収集」は学年進行に伴って強化されているが、「大学情報」の方が早めの進行となっている。大学からの発信は、各学年のニーズに対応した内容の提供を心掛ける必要がある。

3.5 オープンキャンパス等への対応

オープンキャンパスや進路相談会は、教育内容や入試情報の周知を図り、受験生に直接接する機会として重視する大学が多いが、高校側ではこれをどう指導しているのか。その結果を図6に示す。

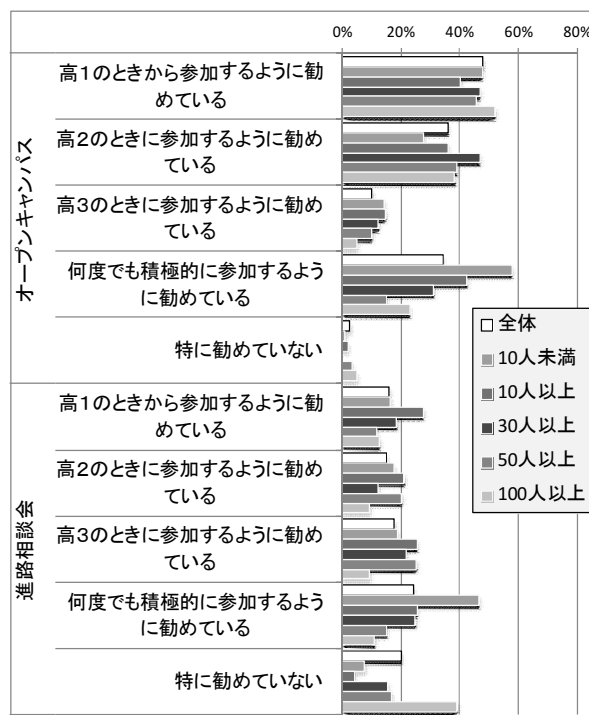


図6 オープンキャンパス等への対応

オープンキャンパスと進路相談会を比較すると、オープンキャンパスへの参加がより積極的に推奨されている。

オープンキャンパスについてみると、「高1のときから」と回答した率が最も高かったのは国公立合格100人以上の進学校である。いっぽう、学年に関係なく「何度でも積極的に」と回答した割合が高かったのは国公立合格10人未満の高校だった。

進学相談会についても、「何度でも積極的に」という回答率が高かったのは10人未満の高校である。国公立100人以上の進学校では約4割が「特に勧めていない」と回答している。

3.6 インターネットの活用状況

本学が毎年実施している新入生アンケートでは、「本学のホームページを見たことがある」新入生は9割に上る。そこで、高校内でのインターネット活用状況を尋ねた。その結果が図7である。「大学のホームページを生徒が進路室などで自由に閲覧できる環境にある」環境が68%の高校に用意されていることがわかった。「自己採点時にのみ開放」「担任や進路担当と相談しながら」など制限を加えている高校もあるようだが、インターネットによる情報収集が広く推進されている。

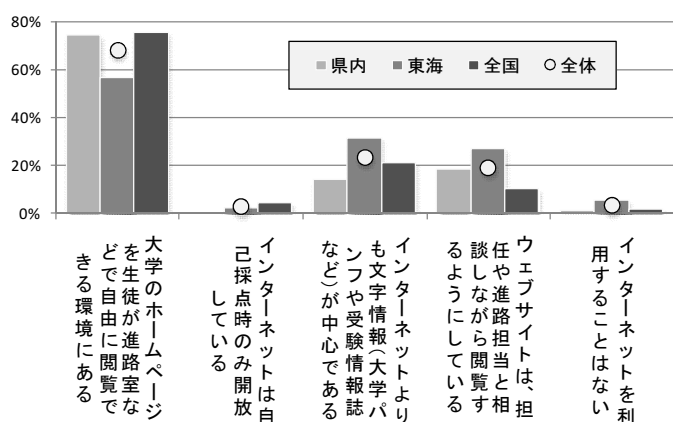


図7 高校でのインターネット活用状況

4 まとめ

今回の調査結果から、高校1年生のときから大学受験を意識した進路指導が行われていること、一般入試については入試データおよび自己採点結果を重視した大学選びをしていること、AO入試や推薦入試などについては高校の進学実績で対応が大きく異なることなどが明らかになった。

国公立合格が100人以上の進学校では、高1のときからオープンキャンパスへの参加を勧め、進路相談会への参加は特に勧めていない。逆に進学実績が10人未満の高校では、何度でも積極的にオープンキャンパスや進学相談会に参加するように指導していることも明らかになった。

オープンキャンパスの参加者は年々増え続け、本学では2007年の約5千人から2011年は約7千人と5年で2千人の増となっている。一般入試の志願者の多くを占める進学校では高1からの参加を勧めていることからすると、オープンキャンパスの内容も、今後は高校1年生を意識したプログラムの提供が必要になるだろう。

進学実績が高い高校ではAO入試や推薦入試に否定的な高校も少なくない。逆に図3のとおり、国公立への進学実績の低い高校では特別選抜に対する期待は高く、進学相談会については、何度でも積極的に参加することを勧めている。一般的な大学情報に加え、AO入試や推薦入試で問われる面接や小論文の実施概要・評価方法などについても、今後は積極的に開示していくべきだろう。

加えて、ホームページを使った情報発信を、量的にも質的にも拡充していく必要があるだろう。